



発行：新潟市仏教会
責任者：小林 一三

「おはからいの中に生かされて」

蒲原浄光寺 蒲原 霊 英

この執筆依頼を頂き、父である前住職が市仏教会長の折に本誌を創刊するにあたって、パソコンに向かっていた姿を昨日のように思い返しております。住職を引き継いで丸2年、私で第27代目住職となります。

寺史を紐解くと、寺伝では、914年には蒲原津に弘法大師創立の放光院愛宕権現があつたとあります。1202年に印信法印が京都西山より別当として来住。

1212年、親鸞聖人が越後「流罪の折、一夜の宿を請われ、その夜住職印信と法論の末、「浄土の教えが真言の教えよりも優れていれば竹杖より逆竹が生ず」と言い残し竹杖を地に刺して去られます。後日竹杖より逆竹が生じ、印信は常念坊法爾と改名し、放光院を「鳥屋野院」と改めて聖人のお弟子となりました。

1221年、順徳天皇は北狩の折に当寺に御幸され、法爾の弥陀の本願報土往生の法話に涙あそばされ一夜を明かし、御念持

仏の阿弥陀如来尊像を御寄進されました。そして、勅命を下され、寺号を「金波山鳥屋野院浄光寺」として勅願所となりました。1449年には蓮如上人が御開祖の御跡を慕い北陸巡化で御下向され、「はるばると越路に祖師の跡とへば涙に染むる紫の竹」の御歌を残されます。それ以降歴代門主の御下向が今日迄続いていきます。



蓮如上人孫・顯誓著「反古裏書」(1568年)
「越後国蒲原といふ所に一字を建てまします浄光寺と号すこれ勅願所なり又鳥屋野院と申し奉る貴場あり順徳院御幸有りし所なり かの所に紫竹あり昔より今に繁茂せり仏閣のその跡には今に草一茎も生ひてずし諸人たうとみ奉るものなり候」

1671年、度々の信濃川の氾濫による水害の為、鳥屋野に堂宇を残し(現西方寺)現在地へ移転します。その後、幾度も火災で本堂を焼失し、現在の本堂は1937年(昭和12年)に建てられたもので、平成6年から9年にかけては平成



本堂 (昭和12年築)

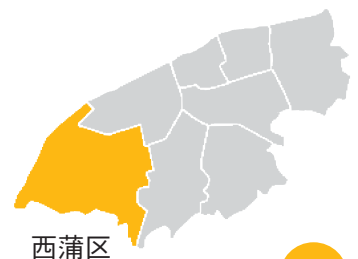


山門 (平成14年築)

の大改修が行われました。振り返ってみると、現在に至るまで順風満帆の時ばかりではなく、辛く苦しい時代を沢山の方々のご尽力によって乗り越え護寺されて来たのだと改めて感じ入ります。思えば、自分の一番大事ないのちの生き死にですら自分の思い通りにできない私達は、何一つ自分の力では決められず、様々なご縁を頂きながら、すべては仏様のおはからいの中に生かされているだけです。どんなご縁でも一つひとつのご縁を大切に、そのおはからいに感謝しながら、ご縁のあつた方のお心が少しでも楽になれますように、日々の法務や寺務にあたって参りたいと思っております。

合 掌

シリーズ 市区八区



西蒲区

西蒲区の記事

報恩の夕べ

供灯供花

西入寺 藤波龍英

かつては、「ホンコぎもん(着物)」、「ホンコげた(下駄)」、「ホンコだんご」などが生活の節目を示す大切な言葉として生きていました。このことは報恩講が尊い仏縁・仏事として、先人たちの生活にいかにかかわりをもっていたかを物語っていたと言えます。

冬を迎え、野山が雪に覆われる頃になってようやく報恩講が動きまりました。すり減った下駄も、ほこり、汚れが染みついた着物もホンコが来るまではと我慢したものです。

昨今の豊かさで便利さは、生活も心も一変させました。人びとの生活から遊離していく一方の仏事・法要になんとか回復の手だてを見出したいのですが…。

わが寺は、真宗大谷派三条教区第十八組に所属し、檀徒・地域有縁の人たちと共に念仏相続と言う尊い法灯を継承して来ました。



供灯供花を終えて

元々米作中心の純農村地帯ながら急速な都市化に伴い、三宝帰依の心も次第に希薄化の波にさらされつつあると言えましょう。そうした現状に鑑み、例年十月の第二日曜日にお勤めしている報恩講に加えて前日の土曜の夕方に新たな集いを設けてみました。「報恩の夕べ」と名付けて地域に呼びかけ、夜なら何とかお参り出来そうだという人たちの集まりを期待して、始めてから十余年になります。

27 報恩の夕べ次第

10/17(土) 19:00

- 1 児童供灯供花
- 2 児童代表焼香 (BGM みほとけは)
- 3 真宗宗歌
- 4 三 帰 依 文
- 5 正信偈唱和 (児童控室移動)
- 6 念仏・和讃
- 7 御俗姓拜読

～～～休憩～～～

- (児童合流、記念撮影)
- 8 仏典童話(大画面)
- 9 恩 徳 讃
- ※ お 夜 食

旧潟東地区は真宗寺院が七ヶ寺ありますが、保育園事業はどこも行っていないません。したがって他地区に比べて、園児、幼児のうち寺院での仏事・法要に遇う事が殆どないまま大人になっていく子供が多い事になります。こうした体験を幼少時にもつ事は、今後の成長には極めて貴重であると言えます。



出番を待つ



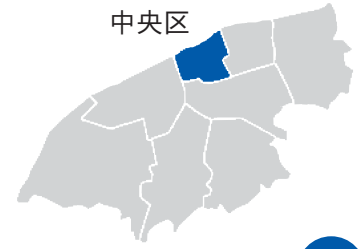
一灯一輪を供える

子ら供う 菊の香清し 宵の堂

一灯一輪を真剣な眼差しで供えてくれた子供たち、温かく見守ってくれた親、孫親、有縁各位に感謝しつつ。

シリーズ 市区八区

中央区



中央区の記事

晋山・結制式

(しんさん・けっせいしき)

瑞光寺 桑原弘光

平成二十七年五月、当山において先代住職厳修以来、約三十年振りとなる晋山・結制式が執り行われました。

晋山式とは、新任の住職がそのお寺に正式に入るための儀式です。晋山式の「晋」は進むという意味です。お釈迦さま、両祖さま（大本山永平寺を開かれた道元禅師・大本山總持寺を開かれた瑩山禅師）がお示しになられた教えの道を進んでいくのです。

「山」とはお寺のことです。寺院には多く山号が付けられています。寺院を山というため、「山に晋(すす)む式」と書いて「晋山式」としています。一語で述べるならば「住職就任式」というべき式であります。

「結制」とはお釈迦さまが定められた制度に従い、大勢の修行僧が一カ所に集まり修行をすることをいいます。修行僧のリーダーとなる首座和尚が置かれ、お釈迦さまの多くの故事に習った法要が、概ね二日間に渡り厳かに営まれていきます。中でも、住職に代わり修行僧のリーダーを務める首座和尚が、その式に参加している大勢の僧侶達と大迫力の大問答を展開する場面は、一番の見どころであり、本堂全体が興奮と感動に溢れ、まるで自身も修行僧になったかのような雰囲気になります。

お寺は、教えを学び仏心を受け継ぐ人間形成の道場であり、ご

先祖の霊場です。住職は檀信徒に法堂（本堂）を広く開放し、皆様方の信仰、修養の道場とする旨を宣言し、本堂中央にある須弥壇上に登り、まず祈りを捧げる言葉や、報恩の言葉を、香を焚きながらお唱えします（これを香語といいます）。更に住職自身の器量と覚悟を問われ、お釈迦さまに成り代わり佛法を説く禅問答が繰り広げられます。まさに、寺院開山（山を開く＝寺を開く）以来の厳しい修行の型を示すものなのです。

多くの檀信徒、ご寺院様方のご理解とご協力の下、宗門の教えと歴代住職からの教えを受け継ぐ、責任重大な大行事であります。

各宗門それぞれに、独特の修行・法要等の形式があるかと思えます。曹洞宗に於いては、この式典が最高の式であり「大和尚」という宗門最高の法階資格を得られます。「晋山・結制式」とは、一寺の住職としての一世一代の晴れの盛典であります。

曹洞宗務庁HPより一部引用

『新潟市に区が八区』あることと、仏教語にある『四苦八苦』をかけて、各区の記事を順番に紹介するコーナーです。



多くの僧侶達が法要に出席して下さいました



住職は多くの僧侶達と問答を繰り広げる



お稚児さんと共に山門頭まで「おねり行列」

予告

第10回 市民のための仏教講座

講師／宮崎 哲弥 氏 演題／仏教が救う「現代」

日時／平成28年10月18日(火)



評論家。

1962年福岡県生まれ。慶応義塾大学文学部社会学科卒業。

政治哲学、宗教論、サブカルチャー分析を主軸とした評論活動をテレビ、新聞、雑誌などで行う。

◆出演番組など：

水 TenNY『スッキリ!!』／BSN『ありえへん∞世界』

木 NHKBSプレミアム『英雄たちの選択』

金 BSN『ひるおび!』

◆雑誌（執筆中の連載）：

文藝春秋社『週刊文春』「宮崎哲弥の時々砲弾」

小学館『SAPIO』「宮崎哲弥の食漫全席」

◆著書、共著（最近のもの）：

『宮崎哲弥 仏教教理問答』（2013年(文庫)、2012年(単行本)、サンガ）

『知的唯仏論』（2012年、呉智英氏との共著、サンガ）

ネパール大震災その後

四月二十五日十一時五十分に発生した大地震から七カ月が過ぎました。

この間九月二十日に共和制の憲法が公布されましたが、インド国境のテライ周辺の州が納得せず、政治は混乱し、復旧、復興は大幅に遅れを来たしております。

ガソリン、プロパンガス、医薬品、食糧品などの不足から生活は大変な状況が続いています。学校は休校、工業は操業が出来ず、観光客は無いに近い状況であります。

これはインドからの国境封鎖の影響であり、ましては続くものと思慮され、寒さに向けて大変な状況には心が痛みます。

さて、仏教会に寄せられました浄財は十一月十二日現在で一、金四十二万七千八百四十四円に達しました。

ここに謹んで感謝を申し上げます。一日も早く日本大使館を通じて、現地に届けたいと準備しております。さらに復旧、復興は長期にわたると思われまますので、今後とも温かいご支援頂ければと念じております。

十一月二十五日

小林 一三 記



御恩 御恩と鐘の音

瑞林寺 廣澤 晃 隆

毎朝午前六時に鐘をつく。夏の朝はずでに明るくすがすがしい。散歩がてら通りがかる人がその音(ね)に合掌して下さる姿もある。ところが冬になると辺りは真つ暗でとても寒い。雪が吹雪くと立っていられない。次の鐘をつくまでの間がとても長く感じられる。でも「お寺の鐘を毎朝聞いています」とか「毎日目覚ましにしています」と近所の人に言われるとうれしいものである。だいが遠い所まで聞こえているらしくこちらが驚くこともある。

そんなある日、一本の電話があった。お寺の鐘がうるさくて朝、眠れないのだと。精神的に夜眠られず、朝方ようやく眠れたと思つた矢先に鐘の音が鳴り出す。せつかく眠りについたらのに起こされるといのが我慢できないという理由であった。確かに周りは宅地化され、そういう苦情が出てもおかしくはないのであるが、今までそんなことを言う人はなかった。時代の流れといふべきものなのか。

割り切れぬ思いはあったが、冬場だけ午前七時に変更して鐘を打つようにした。それでもまだ「眠れない」とその人から苦情がくる。午前七時はもう通勤の車も走っていて人が動き出す時間である。ここだけはゆずれませんと貫き通している。朝晩が逆転している生活を送る人もいる。しかし日の出とともに朝を知らせることも大事だ。お寺の鐘は「御恩、御恩」と鳴りながら、そういう現代の風潮を問いなおす音色でもあるのだらう。

